
お勘定

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お勘定

【Nコード】

N4347B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

実習生の堀田にお勘定を迫る老婦人。堀田はマニュアル通りに対応するのだが、つい本音が・・・

「ちょっとそのボーイさん、お勘定してくださる？」

小花柄のシフォンのブラウスを身にまとった、美しい銀髪の婦人が堀田に言った。

「かしこまりました。只今キャツシャーに申し付けますので、今しばらくお待ちください」

堀田は失礼のないよう、マニュアル通りの返答をした。

「さつきから待っているのに、遅いわねえ・・・」

婦人は少し苛立っている様子だった。

丁寧に辞儀をし彼女の視界から逃れた堀田は、床の上の食べこぼしをモップで拭き始めた。

こつちを先に片付けないと、後から先輩に叱られる。誰かが滑ってけがでもしたら、たまったものではない。自分に責任が課せられるのが落ちだ。なんせ自分はまだ実習生の身分。

壁に掛かった時計を見ると既に4時をまわっていた。シンクの中に溜まった汚れ物を洗浄しなければならぬ。

急いでパントリーへ向かう途中、先ほどの婦人にまた声を掛けられた。

「ちょっとそのムッシュ。お勘定してちょうだい。何時間かかっているのかしら」

まったく、この忙しいときに・・・自分には自分の担当があるのだ。しかし課せられた仕事だけをこなしていたのでは次なるスキルアップは望めない。

堀田は冷静に穏やかに笑みを浮かべ、マニュアル通りの返答をした。

「大変申し訳ありません。ただ今立て混んでいますので、もう少々お待ち頂けますか？」

「困ったわ。早くお勘定してくれないと、帰れないのよ」

婦人はブラウスの袖口を少しめくり、腕時計を見る仕草をした。

「あら、私のヴェルジュの腕時計はどこへ行ったのかしら。おかしいわねえ」

婦人はバッグの中や、テーブルの上に置かれた一輪挿しの花瓶の裏など、一通り身の回りを探し終えると、意味ありげに堀田の顔をじっと見据え、そして言った。

「あなた、盗ったでしょう？」

予想していた通りの質問であった。堀田は動じず、マニュアル通

りの返答をした。

「とんでもございません、奥様。だいいち奥様は最初から腕時計などはなさっておりますでしたよ。それより、この花は何っていう名前でしたっけ。奥様のように可憐で美しい。僕、大好きなんですよ。この花……」

少しやり過ぎた感は否めなかったが、婦人は少女のように頬をほんのり赤らめ、笑顔を浮かべた。

「何て言ったかしらねえ、この花……えーっと、確か、えっと」

婦人が花の名前を思い出そうと四苦八苦しているすきに、堀田はパントリーへと走った。

それどころではなかった。そろそろディナータイムだ。

調理場から荷物用のエレベーターで運ばれてきたメインディッシュを小分けにし、付け合せの野菜を盛る。

本日のメインディッシュは舌平目のムニエルマンゴーソース掛けに、付け合せはボイルドアティーチヨークだ。

スープ皿にドライタガメのコンソメスープを注ぎ、デザートのリアンにフォークを添える。

準備が揃ったら、トレイに載せて食堂へと運ぶ。落とさないように慎重に運ばなければならない。

食堂には依然、件の老婦人が同じ席に座り続けている。

「ムッシュ。お勘定はどうなったの？早くお勘定してちょうだい」

見る迄もなく婦人はかなり苛立っていた。

堀田は失礼のないように細心の注意をはらい、マニュアル通り空とぼけて答えた。

「おや？まだキャッシャーから何も言ってきませんか？」

「そうなのよ。まったく。一体全体この店はどうなっているのかしら……」

「丁度よかった。それではマダム、これよりディナータイムとなりますので、夕食も召し上がっていらしてはいかがですか？」

「そんな……」

「どうせ、朝ご飯も昼ご飯もここで食べたんだからさ。勘定すんだって帰る所ないんだら……」

「えっ？」

おっとヤバイ！こういう返答はマニュアルにはない。しかし運良く堀田の声は、難聴気味の老婦人の耳には届かなかったようだ。堀田は胸を撫で下ろした。

老婦人はコンソメスープを口に運びながら言った。

「ところでムッシュ、見かけたことあるような顔だけど、あなたのお名前は？」

「いやだなあ、マドモアゼル。僕は介護実習生の堀田ですよ。もういい加減僕の名前覚えてくださいよ」

「堀田さんね。わかったわ」

白髪の上品そうな老婦人が言った。しかし5分も経たないうちに、自分の名前を彼女が忘れてしまうことを堀田は知っている。

「さあ、食事が済んだら、そろそろおむつ交換の時間・・・おっと、失礼。ふたりっきりの秘密の時間だ。それでは、ベッドルームへ参りましょうか？マドモアゼル！」

「メルシー ムッシュ」

車椅子に乗った老婦人は堀田の介護の元、自室へと移送されて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4347b/>

お勘定

2010年10月28日06時22分発行